

話題作を続々上演

コンテンポラリーダンスの最前線

彩の国さいたま芸術劇場が、開館当初から最も力を入れていたプログラムのひとつが、コンテンポラリーダンスの紹介だ。日本のカンパニー公演のほか、欧米の注目作品を多く招聘してきた。今年後半から来年にかけても話題の海外作品が続く。なにが注目すべき点か、同劇場のプロデューサー、佐藤まいみが見所と魅力を語る。



©Lois Greenfield



©Chris Herzfeld

Hip-hopでアスリート モーションVSストップモーション オーストラリアン・ダンス・シアター 『HELD』

【日時】9月30日(土) 開演 19:00
10月1日(日) 開演 16:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『HELD』

【構成・演出・振付】ゲアリー・シュワート

【出演】オーストラリアン・ダンス・シアター

ロイス・グリーンフィールド(写真家)

【チケット(税込)】一般 S席 5,000円 A席 3,000円
学生A席 2,000円
メンバーズ S席 4,500円 A席 2,700円

若者たちの生態の、その刹那を捉えた オーストラリアン・ダンス・シアター

アスリートのような引き締まった身体で、跳躍し、回転し、格闘技のように激しく踊るダンサーたち。この秋に初来日公演が予定されている、オーストラリアン・ダンス・シアターは、なにかかも新鮮で、従来のコンテンポラリーダンスの既成概念を打ち砕く。

「オーストラリアの荒削りな野性味に、パンクテイストが加わって、迫力ある作品になっています」(佐藤まいみプロデューサー、以下同)

舞台上では、女性フォトグラファー、ロイス・グリーンフィールドが目前で踊るダンサーたちの一瞬を鋭く捉え、それがそのままスクリーンに連続投影される。映像に交錯する、激しく踊り続ける生身の肉体。

「原始のエネルギーと現代の繊細さが閃光のように出合っているような、言葉にできない空気感があります。これはオーストラリア独自のもの。ほかのどこから出てきにくい質感ですね」

ヒップホップやパンク、ロックなどストリート感覚にあふれ、若者たちの生態の、その刹那を確かに捉えた作品は、コンテンポラリーダンスの新しい可能性を切り拓いている。

民族のアイデンティティを昇華させた アクラム+シディ

来年の1月に公演が予定されている、アクラム・カーンとシディ・ラルビ・シェルカウイによる『ゼロ度 zero degrees』も、とても興味深い作品だ。バングラデシュ系イギリス人、アクラム・カーンと、モロッコ

系ベルギー人、シディ・ラルビ・シェルカウイ。共にソロのダンサーであり振付家である二人のコラボレーションで生まれた作品は、アクラムがバングラデシュからインドへ向かう旅の途中で実際に巻き込まれた事件をもとにしている。

「二人はオリジンな文化から引き離されているわけです。周囲に違和感を感じているのだと思いますが、バングラデシュやモロッコにも自分の居場所はないかもしれない。そんな二人が二人なりの表現で、文化の違いを乗り越えたコミュニケーションの可能性を作品にしています」
シンプルな衣装の二人は、時になめらかな手話のような動きを互いになぞり、時に対立し、また寄りそう。シンクロする心と心そのままに、美しく繊細な緊張感に包まれる作品は、やがて静かなラストを迎える。「静かですけれど、力強く引き込まれる舞台です。様々な葛藤を作品にすることで、自分たちを浄化し、それによって観る側も浄化されるのだと思います」

どうしようもないジレンマや苛立ち、怒りを昇華した作品に貫かれているのは、一遍の詩のような美しさだ。

どの瞬間も絵画のように美しい ヤン・ファーブル作品

2001年のアヴィニオン演劇祭で衝撃的な初演をした、ヤン・ファーブルの『わたしは血 JE SUIS SANG』も、来年2月に上演を控える。

「この作品では、主人公は血なのです。最後に『私は血だ。誰も私を傷つけることはできない』のナレーションで終わります」

コンセプトは明快だ。今日、人間は一見現代的に見えるとしても、



©Tristram Kenton

最注目のダンサー／振付家による奇跡のデュエット アクラム・カーン+シディ・ラルビ・シェルカウイ

『ゼロ度 zero degrees』

【日時】2007年1月12日(金) 開演 19:30 / 13日(土) 開演 16:00 / 14日(日) 開演 16:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『ゼロ度 zero degrees』

【振付・演出・出演】アクラム・カーン、シディ・ラルビ・シェルカウイ

【音楽】ニッティン・サウニー 【彫刻】アントニー・ゴームリー

【チケット(税込)】一般 S席 5,000円 A席 3,000円 学生A席 2,000円

メンバーズ S席 4,500円 A席 2,700円

【発売日】10月初旬(予定)

本質は中世の頃から変わっていない。原初の本能のままに、欲望にまみれ、恥辱とともにある。その象徴として描かれるのが“血”だ。暗い舞台に蠢く人々。甲冑を身に着けたもの、司祭のような服を着たもの、中には純白のウェディングドレスを身に纏うものも……。その中で唯一、鮮烈な色彩を放つ“血”は、媚薬のごとく観る者を惹きつけてやまない。どのシーンをとって、絵画あるいは彫刻を思わせる完成された美は、美術家としてのヤン・ファーブルの才能が舞台の上に結実したものだ。

「彼は昔から血に興味があったと言います。誰でも子供の頃は、神秘的なものに惹かれたり、残酷な部分ってあるものですよね。けれど、大人になるとどんどん隠されていく。だからこそ、ヤンは作品でそれを探求したのだと思います」

それは決して人間の暗部への探求だけではない。見るものの解釈にもよるのだが、希望や融和ともとれる結末が用意されている。

「『ラストシーンでは、すべての血は混じり合うのだ』というヤンの話を聞いていると、そこに彼が未来への希望を託しているようで、作品の奥行きを深さを思い知らされています」

退廃や破壊の後、人々は自らの中にあるはずの善に一縷の希望を見出す。そうして観ていくと、この作品は現代社会の行く末を見つめる、ヤン・ファーブルの祈りに思えてくる。

「アート作品は自分たちが生きている社会と切り離して観ることはできないですからね」

コンテンポラリーダンスは、社会を映し出す鏡、と言えるかもしれない。そこに観る者は呼応し、共鳴し、新鮮な驚きを感じるのだ。



アヴィニオン演劇祭を震撼させた衝撃作

ヤン・ファーブル テキスト・舞台美術・振付 ~中世妖精物語~

『わたしは血 JE SUIS SANG』

【日時】2007年2月16日(金) 開演 19:30 / 17日(土) 開演 16:00 / 18日(日) 開演 16:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『わたしは血 JE SUIS SANG』~中世妖精物語~

【テキスト・舞台美術・振付】ヤン・ファーブル 【出演】俳優、ダンサー、ミュージシャン 23名

【チケット(税込)】一般 S席 7,000円 A席 5,000円 学生A席 3,000円

メンバーズ S席 6,300円 A席 4,500円

【発売日】11月中旬(予定)